

歌の大地、ベンガル　　バウルとコビガン

丹羽京子

大詩人タゴール (Rabindranath Thakur, 1861-1941) にも若く無名なころがあり、そのタゴールが大いなるインスピレーションを受け、その後の運命を変えた出会いがある。

詩が「書ける」ことは確かであつたにしろ、その前途が未だ茫漠としていた三〇代のはじめ、タゴールは東ベンガルのシライドホに暮らした。現在のバングラデシュ、クシュティア県に位置するその地は、ガンジス河下流の、その土地ではポツダ河と呼ばれる大河に寄り添うようにして存在する。名家の末っ子として生まれたものの、学校では落ちこぼれ、イギリス留学でもそれほど得るところはなく、このころのタゴールは、優秀な兄たちに比べてぱつとしない存在だったが、父、デベンドロナトはそんなタゴールに所帯を持たせ、クシュティアにあつたタゴール家の領地管理を言いつける。これが詩人にとって初めての、本格的な農村生活の始まりであつた。

この地でタゴールはバウルと巡り合う。バウルの語源は明らかではないが、一説ではサンスクリット語のヴァートウラ (vātula 狂ったもの) ではないかと言われている。さもありなん、バウルは神秘主義的な吟遊詩人と言われるが、その歌い、踊る姿、そして酔狂とも言える生き様は日本語の「吟遊詩人」につきまとう牧歌的なイメージとは程遠い。このバウルはベンガル

では数百年前から存在した。ヒンドゥーでもムスリムでもなく、既成のどんな宗教にもよらず、そして世俗を離れたその生き方は潔い。バウルはただバウルであり、そして歌によって自らが「心の人 (maner manush)」と呼ぶ存在との合一を追求する。そのバウルの中でも伝説的な存在であるラロン・フォキル (Lalon Fakir, 1774?-1890) はタゴール家の領地であつたクシュティアに暮らしていた。現在クシュティアにはラロン廟があり、そこはバウルにとっての聖地である。タゴール本人がラロンに会っていたかは定かではないが、タゴールの五兄ジョティリンドロナトは確実にラロンと親交があつた。このジョティリンドロナトが描いたとされるスケッチが、ラロンの唯一の肖像画である。

ラロンの生涯はしばしば謎に包まれている。定説によれば、ヒンドゥーとして生まれたラロンは、聖地巡礼の際に病に倒れ、仲間に置き去りにされたところをムスリムによつて救われ、いったんムスリムとなったのちにバウルの道に入ったとされる。そんな自らの生い立ちを意識したラロンの歌がある。

みなが問う、ラロンはいったいどんな生まれなのか？
ラロンは言う、生まれにどんな形があるというのか、
この目で見たことはない、

ある人は花輪をかけ、ある人は数珠を持つ
それによつてどんな生まれがわかるというのか
死ぬとき、生まれるときに、誰が出自の印を持つのか

井戸にあれば井戸水と呼ばれ、ガンジス河を流れれば
聖なる水になる
元は同じ水であり、それに違いはない、器によつて違
いは生まれる

世界中で生まれの話があるけれど、人々はそれを自慢
するけれど
ラロンは彼の生まれを、七つのバザールで売つてし
まった。

コミュニズムを牽制する意味を込めてか、バングラデシュ
の八年生の国定教科書にも掲載されているこの歌は、比較的わ
かりやすいものだが、バウルの歌すべてがわかりやすいわけ
はない。否、むしろバウルの歌は一見シンプルなその歌詞にも
関わらず、実は難解である。バウルはグル（師）に弟子入りし
て歌をはじめとするさまざまな教えを受けるのであり、バウル
の歌の本当の意味は弟子となつて初めて明かされる。ラロンの
歌をもうひとつ――

新月の夜、月ほどの町へ行つてしまったのか
次の日に、月は昇るが見ることはできない

月ごとに、月は昇り
新月は、月の終わりに
太陽の新月はいつ？
それを知らなければならぬ。

月は満たされれば
満月となる
十五日目をなぜ
満月と学者は言うのか

体が月であることを知れば
黄金の月の秘密を得る
シラジ・シャがラロンに言う、おまえは
蕾に惑わされ真実を見失つたと

シラジ・シャはラロンの師の名前、そしてバウルはしばしば
自らの体を月に喩える。この歌にも奥の意味がありそうであ
る。

ラロンではないにしろ、詩人タゴールはこのクシュティアの
地でバウルと出会い、その歌に完全に魅了された。バウルの歌
はある種、タゴールの理想の形態でもあったのである。タゴー
ルは言う、「彼らは貧しい。満足な衣服も着ていない。見た目
では、彼らがいかに偉大であるかわかるすべはない。しかしそ
の彼らが、どれほど深遠なテーマをいともたやすく語つてみせ
ることか」。そしてまた、バウルとタゴールのこんなやり取り

もある。

——あなたがたのこの信仰の歌をどうして世界中の人々に聞かせないんです？

——渴きを覚えたものは、自分でガンジス河まで来なければならぬのです。

——それであなたが見るところ、だれかやって来るのでしょうか？

——みんな来ますよ、みんな来なければならぬのです。

パウルのこの無欲さ、そして自らのありように対する自信はタゴールの憧れるところであり、このパウルと交わることによって、タゴールは詩人として大きく成長していった。ただパウルのみではない、生きたベンガルの伝統と交わったクシュティアにおける日々なしでは、タゴールはおそらく詩人として大成することはなかっただろう。

晩年の散文詩集、『木の葉の皿 (Patraput, 1936)』の十五番目の詩は、タゴールが自らを振り返るようにして綴った長詩であり、それはパウルのあらわれるシーンで始まる。

彼らの生まれは卑しい、

彼らは聖句を持たない。

神の住処の戸口では、

祈りを商売にする者が

彼らを押しとどめる。

彼らは神を探して回る、

神自身の居場所

すべての囲いの外で

質素な信仰の光の下で、

花を並べた森で、

親しい人との出会いと別れの

深い苦悩の中で。

鋳型にはめられ作られたものとして、

壁で囲われた戸を上げて、

神を見る方法など彼らは持ちはしない

どれだけ見てきただろうか、

彼らのような修行者を

一人、朝陽を受けるポツダ河のほとりで、

分け隔てるものもない、その河のほとりで、

古びた寺院の古い礎石は毀れてしまい、

そして私は見た、

彼らがエクタラを手に進むのを

歌の流れをなびかせながら

心の人を捜し求めて

深い孤独の道を。

私は詩人、彼らの仲間だ——

パウルは既成の宗教から締め出されているのではない、既成の宗教にはパウルの求めるものがないのである。そしてここに描かれるように、エクタラ（二弦琴）を手に、「心の人」を捜し求めるのがパウルの典型的な姿である。タゴール自身はパウルとなることはなかったが、少なくともパウルの仲間であると

感じ続けていたのだろう。詩人としてのありようにおいても、その創作のエッセンスにおいても、タゴールはバウルから多くを得た。そしてそれが最も色濃く表れているのは、タゴールの詩よりも歌である。

バウルと出会う前からタゴールも多くの歌を作っていた。タゴール家には音楽の教養が溢れており、本家、コルカタにあるジョラシャンコの邸宅には、戯曲の公演やコンサートに使われるホールがあつた。そもそもタゴール家は、ムガル帝国崩壊後に宮廷という庇護者を失ったインド古典音楽家たちの有力なパトロンのひとつでもあつたのである。さらにめずらしいことにタゴール家にはピアノもあり、兄たちのなかには西洋音楽に親しんでいるものもあつた。

しかしバウルの歌は、それとは異なる水脈を汲んでいる。それらはほとんどベンガルで古くから歌い継がれてきた民俗歌謡をベースとしており、その旋律にタゴールは魅せられた。

タゴールは最終的に二六〇〇曲あまりの歌を残したが、実はその中にはバウルの歌の旋律をそのまま採用したものが少なくない。例えば今日でもしばしば耳にする「もし君の呼び声を聞いて (Yadi tor dak shune)」も、もともとはバウルの歌であつた。

もし君の呼び声を聞いて

だれも来なければ

ひとりで行け

ひとりで行け

もし誰も口を開けず

もしみな顔そむけ

恐れていたとしても

それでも心を開き

心の内をひとりで語れ

歌はうたい継がれる。この歌はその後、ガンディーの愛唱歌としても知られることになるが、そのガンディーは、タゴール没後、分離独立の前夜となる一九四六年に、コミユナル暴動の吹き荒れる東ベンガルを、この歌を口ずさみながら歩いたという。

タゴールは様々な歌を書き残したが、その中でも「もし君の呼び声を聞いて」のような「シヨデシュ (shadeshi, 自らの国、を意味する愛国的な歌)」と呼ばれる一連の歌は一九〇五年前後に集中して作られている。一九〇五年はベンガル分割令に伴う民族運動のうねりが高まった時期で、基本的に政治からは距離を置いていたタゴールが、例外的に熱心に運動に加わったのがこの時期だったのである。これらの歌は各種集会でタゴール自らによって披露され、歌い継がれていく。

「わたしの黄金のベンガルよ、わたしはあなたを愛す」で始まる「黄金のベンガル (Sonar Bangla)」もそうした歌のひとつであり、これもまた、バウルの歌の旋律に乗せたものである。「シヨデシュ」の歌は、独立運動が活発になるにつれ、ますます広く歌われるようになるが、分離独立後、パキスタンに参加した東ベンガルでは、タゴールソングは一時期パキスタン政府によって禁止される憂き目にあう。それでも、否、それゆえますますこれらの歌はうたい継がれ、一九七一年、この地が独立戦争に突入すると、人々はとりわけ「黄金のベンガル」に独立

への思いを託すようになっていった。そしてついに独立を果たしたあかつきに、この歌はそのままバングラデシュ国歌となる。

「黄金のベンガル」を書いたのと同じころ、一九〇五年にタゴールの『バウル』という歌詞集が出版されている。そのうちのひとつ――

あなたを気の触れた者だと言う彼

彼には何も言わぬがよい

彼は今日あなたを何と思つて

その身を穢そうとするのか

その彼が朝になれば花輪を手に

あなたの後ろをついてくるだろう

今日のところは自らの栄光に満ちたまま

彼を座布団の上に座らせておけ

明日には愛に目覚めて降りてくる

そして頭を垂れるだろう

バウルはしばしば「パゴル (Pagal, 気の触れたもの)」とも呼ばれるが、社会の境界線上に暮らす彼らの立ち位置には微妙なものがある。しかしタゴールは、かつて出会ったバウルが「みんな来ますよ」と断言したように、明日になれば人々はバウルに頭を垂れると歌う。

百年以上も前に書かれたこれらの歌は、今日でもまったく古びることなく歌われている。例えば、「もし君の呼び声を聞いて」も「あなたを気の触れた者だと言う彼」も、ごく最近の

映画で違和感なく主題歌として使われている。前者は「物語 (Kahani, 邦題は「女神は二度微笑む」。ヒンディー映画)」というテロリストを追い詰める女性を描いた映画の最終シーンで、後者は「魚のスープカレー (Macher Jhol, 日本未公開、ベンガル映画)」というエリートコースを捨てて料理人となる男性を描いた映画のオープニングで、さりげなく、そしてのびやかに歌われる。百年以上が経ち、その歌が作られたシチュエーションとおよそ異なる場面で使われるこれらの歌は、また新たな感動を呼んでいる。

タゴールほどの世界的な知名度はないが、地元ベンガル、特にバングラデシュでタゴールと並び称される国民詩人がいる。カジ・ノズル・イスラム (Kazi Nazrul Islam, 1899-1976) である。ノズルルは生まれも育ちも性格も、そして生涯の歩みも、なにからなまでにタゴールとは対極の存在であった。ただひとつ共通しているのは、詩人として絶大な存在であると同時に、歌の世界で大きな足跡を残したことである。ただしその歌はタゴールと異なるルーツを持つ。

ノズルルは貧しいイスラム教徒として生を受けている。幼くして父を亡くしたことでさらに生活に窮し、イスラム教徒のための初等学校モクトブを終えると、わずか十歳にして自ら身を立てることを余儀なくされた。このとき、叔父の率いていたレトという旅芸人の一座に加わったことが、ノズルルの生涯を決定づける。レトにおいては歌の技量がその成否を左右するが、ここでノズルルは歌作りを叔父から学ぶのである。レトにおける歌とは即興の歌であり、その真骨頂はコビガンと呼ばれる歌

の勝負にある。

タラシヨンコル・ボンドパッダエ (Tarashankar Bandyopadhyay, 1898-1971) の名作『詩人 (Kabi, 1944)』は、このコビガンを見事に映し出している。ノズルルの属したレトであれ、別の名称を持つ芸能集団であれ、その基本はコビアルと呼ばれるリードシンガーと数人のバックシンガー、そしてリズム楽器を中心とする演奏者で形作られる。これに野外劇を演じるジャットラの面々や女性の踊り手などが加われば完璧なラインアップとなる。

タラシヨンコルの小説の主人公ニタイは、こうした旅芸人の一座でコビアルになることを夢見ている。ニタイはドームの出身である。ドームとは、その地域では最下層に位置付けられるカーストで、ムガル時代には傭兵として働いていたものの英領時代になって没落し、職業的な強盗団に身をやつしたと説明されている。しかしニタイは家業につくことを阻み、ひとりクーリー(荷運び)として働きながらあちらこちらにコビガンを聴きに行く毎日を送っている。コビガンは歌い手のコビアル同士が勝負をするものだが、とある祭りの日、ひよんなことからニタイにチャンスが巡ってくる。片方のコビアルが払いの良い別の祭りに引き抜かれてしまったのである。そこで急転直下、残った一団のリードシンガーと筆頭バックシンガーを戦わせることとなるのだが、それではバックシンガーが不足してしまうので歌好きのニタイに白羽の矢が立ったのである。

ニタイははじめバックシンガーとして舞台に立つが、煮え切らない歌を披露し続けるにわかコビアルに業を煮やし、次第にそのポジションに取って代わるようになる。このニタイの活躍

に聴衆は興奮するが、突如歌い手となってあらわれたドーム出身のニタイに相対する本来のコビアル、百戦錬磨のモハデブの歌は辛辣である。

おとなしかったドームの子が

突然本性をあらわした

おそろしい鎌を振りかざし

歌をうたうとやってきた

あの子の父さんは強盗で

爺さんは旅人を襲った

別の爺さんも恐ろしい強盗

遠くの島で死んだという

その血筋に生まれたものが

詩人になろうというのだから

ドームの子がヴァールミキとは

海老の子が鯛になろうというもの

ごみ箱に散らばるバナナの葉

天に昇って行きたいだとき

ちぎれた葉っぱが浮き上がり

天に昇って行きたいだとき

もちろん今はカリユガだから

何も言えることはない

蚊めがガルーダになるとも

天に昇っていききたいだとき

容赦ない攻撃、これがコビガンである。現代でこれに近いも

のと言え、エミネムの「8 mile」で見られるようなラップの勝負であろうか。そしてバックシンガーは即興の文句のうち、気の利いた部分を繰り返す。ヴァールミキはラーマーヤナを書いた詩人、ガルダはヴィシュヌ神が乗る天界の巨鳥、カリユガはインド古来循環すると考えられてきた四つの時代設定のうち最後の時代、暗黒時代のこと。現在はカリユガに属するので、なんでもありうる、というわけである。ちなみにこうした祭りの場では、皿代わりに使われるバナナの葉が散乱する。「ごみ箱に散らばるバナナの葉、天に昇って行きたいとき」はこのあと何度繰り返されるフレーズとなる。

ニタイはキャリアあるモハデブに同等の攻撃をしかけることはできず、この勝負には負けてしまう。それでもこの日のスターはニタイであった。もちろん強盗稼業の家族を攻撃されたニタイは傷つくが、それは歌の席のこと、それがお互いの確執となつて引きずられることはない。

このコビガンの世界に、わずか十歳のノズルルは身を置いた。そして翌年には亡くなつた叔父のあとを継いで十一歳にしてコビアル、つまりリードシンガーとして一座を率いたのである。神話的教養、すぐさま韻を踏んでみせるだけの豊富な語彙、そしてなにより人一倍機転がきかなくてはできない仕事である。ノズルルは地元では「キシヨル・コビ（こども詩人）」として有名になり、数々のコビガンの手合わせで華々しく勝利したことが語り継がれている。

しかしノズルルの生涯は目まぐるしく動いていく。このころ、つまり一九一〇年代にはコビガンの世界は急速に衰退していき、ノズルルは篤志家や奨学金に支えられて十二歳ごろから

再び断続的に学校に通うようになる。学業は順調だったが、高校卒業資格取得直前に、ノズルルは唐突に軍隊に入ってしまった。当時の風潮、つまり第一次世界大戦に協力して戦後の自治権獲得を目指すという流れと、常にノズルルにつきまとっていた経済問題による決断であろう。大戦後になると、ノズルルは連隊の解散を受けてコルカタにやってきた。こうして、すでに知己を得ていた編集者と共同生活をしながら詩や小説を書き、また数々の雑誌を発行する「近代的な」文学シーンの一翼を担うという生活が始まったのである。そしてほどなく、一九二二年、二十二歳のときに発表した一編の長詩「反逆者」が一夜にしてベンガル詩壇を席巻する。

宣言せよ、勇者よ――

宣言せよ、

私は頭を高く上げている！

この私を見て、あのヒマラヤさえも頭を垂れるだろう！

宣言せよ、勇者よ――

宣言せよ、

私は天を引き裂き、

月を、太陽を、星々を越え、

地界を、天界を、霊界を突き抜け、

神の玉座を切り裂き、

宇宙の創造主の永遠の奇跡になつたのだ！

(中略)

私は反逆者ブリグ、神の胸に足跡を記す、
私は創造主を殺す者、

悲嘆と灼熱をもたらし、人を弄ぶ神の胸を、

私は引き裂くだろう！

私は反逆者ブリグ、神の胸に足跡を記す！

私は人を弄ぶ神の胸を、引き裂くだろう！

人間に不条理を強いる神々への「反逆」を宣言するこの詩は若い世代を熱狂させた。ブリグは七人の聖仙のひとり、ヒンドウ教の三大神を訪ねた人物である。眠りからなかなか目覚めないヴィシュヌ神に業を煮やしたブリグが神を蹴ったところ、起き上がったヴィシュヌ神が「足を怪我しなかったか」と尋ねたという故事にちなんでいる。ヴィシュヌ神の寛容さと偉大さを説いたこの逸話をノズルルはひっくり返して使ってみせるが、これもコビガンの言えばコビガンのである。

ノズルルがこの詩をひっさげてタゴールのもとに向かい、「わたしはあなたを打ち負かせてみせた」と宣言したというエピソードがある。真偽のほどは定かではないが、これもコビガン時代の「勝負」と重ね合わせると興味深いシーンではある。もつともタゴールはそうした「勝負」には乗らなかつたろうが。

こうしてノズルルはしばらく「現代詩人」としての名声を欲しいままにするが、徐々にコビアルとしての本領を、それも「近代」の枠組みの中で発揮していくようになる。もつともノズルルは歌から離れたことはなく、軍隊時代も数々の歌を作つて仲間を楽しませていたといい、それらは筋金入りの「シヨデシュ」の歌となる。コルカタに出てきてからもノズルルが「歌

える」ことはあまねく知れ渡り、しばしば歌の会が催されたし、またあるときは、タゴールの前で『ギタンジヨリ』全曲を歌つて見せたという。その際タゴールが「自分でもこれらすべてを一気に歌うことはできない」と驚嘆したという逸話が残っている。ちなみにノーベル賞受賞作の英語版『ギータンジャリ』はタゴール本人による散文訳となつているが、オリジナルのベンガル語版『ギタンジヨリ』は詩ではなく、歌である。

ともあれ二十代のはじめ、ノズルルは現代詩人としてその名を轟かし、そして二十代の終わりになると今度は歌の世界で異彩を放つようになる。そのひとつのきっかけはレコード産業であつた。このころイギリスのレコード会社UK Gramophoneがインドに進出し、「売れる」レコードを模索した結果、広く人氣を博していたノズルルの歌に注目が集まつたのである。

実は「現代詩人」ノズルルはインド政庁から目をつけられており、この抜擢には難色を示す向きもあつた。事実ノズルルの詩集はことごとく発禁処分を科せられていたし、ノズルル本人も政治活動ではなく、そうした詩を書いたことで「動乱教唆罪」なる罪を被せられ、投獄も経験していた。しかし金になるものを放っておけないのが資本主義の性である。はじめはノズルルの名前を伏せてレコーディングが行われ、そして一九二九年には正式契約が結ばれるに至る。予想をたがわずノズルルの書いた歌は爆発的なヒットとなり、ノズルル自身も多額の収入を得るようになる。

このレコード産業で、ノズルルはコビアル的氣質をいかになく発揮する。当時の歌手は、「反逆者」の伝説的詩人に歌を書いてもらおうとノズルルのもとに殺到した。そして即興にだけ

たノズルは、歌手たちの、そしてレコード会社のいかような要求にも即座に応えることができたのである。最終的にノズルが残した歌は二五〇〇曲あまり。散逸してしまったものも少なくない上、ノズルの活動時期は多く見積もっても二十年足らずなので驚異的な数である。

そんなノズルの歌のなかで鉄壁の人気を誇り、今なお有名歌手によつてカバーされ続けているのは、歌詞集『ブルブル (Bulbul, 夜鶯、一九二八)』を中心とした「愛の歌」である。現代詩やその実生活においては過激さの目立つノズルだが、その歌は「愛」に満ちている。そしておよそ愛の歌は古びることがない。

忘れることができない、だから道を違えてやつてきた
私の罪を忘れておくれ、今日のこの夕べの良き時に。

こんな色鮮やかな時に、私とあなたは戯れた
だからその失われた日々を、捜し求めてやつてきた。

あなたが忘れてしまったということを、私は忘れていた
だから私はやつてきた、あなたが彷徨った花咲く森に。

この森の花を摘んで、どれだけの花輪を編んだことか
そこでは今なお、私のブルブル鳥が歌をうたう。

ミュージシャンとしての実績を誇り、そのひとつひとつ個性的なメロディーラインもノズルの歌の魅力だが、そこはかと

ない異国の香りも独特の魅力を放つ。ただしノズルの「異国」は西洋ではない。インド古来からの「異国」、すなわちペルシャに行きつく「西方」の香りである。

実は『ブルブル』に収められたこの歌は、ガザルの形式で書かれており、このペルシャ起源の詩形はそれまでベンガルではあまり知られていなかった。イスラム教徒のノズルには、もともとアラビア語やペルシア語の素養があつたが、それを本格的なものとしたのは、軍隊時代である。ノズルの属した連隊はほぼすべての時期を現パキスタンのカラチで過ごし、そこでノズルはガザル形式の歌作りを学んだ。『ブルブル』よりガザルをもうひとつ――

旅人よ、涙を拭け、戻ろう、自分自身を伴とし。
花はおのずと咲き、そしておのずと散っていく。

狂人よ、それは満たされぬ望み、水で庵を編むとでも？
ここで渴きは癒されぬ、ここには渴きを癒す海はない。

ボクルの花も雨期に咲かず、ポウシュ月に花が咲くとでも？
この国では、ただ過ちばかりが散る、失望の森いっぱい。

詩人よ、どれだけランプを燃やしたことか、自らを明かりとし。
愛する人は来なかった、今日、おまえの世界は闇に包まれる。

ガザルは対句によつて構成され、各対句の独立性に特徴があるが、聴衆は人を唸らせる対句に即座に反応し、作り手もそれ

を受けてその対句を幾度となく繰り返す。そしておそらくここにも、コビアルとしてつちかったノズルルのスキルが生きている。

ノズルルの絶頂期はこの『ブルブル』出版のころである。当時ノズルルはまだ二十九歳、結婚し、長男も生まれ、まさに飛ぶ鳥も落とす勢いで次々と歌を書き、それらすべてがまた飛ぶように売れていった。実は「ブルブル」は、とりわけかわいがっていた長男の名前でもある。しかしそのわずか二年後、かわい盛りのブルブルが亡くなると、ノズルルの精神は崩壊の一途を辿っていくようになる。その後十年間は何とか仕事を続けたものの、最終的にノズルルはすべてのロヤリティーを売り払うほど困窮し、四一年、タゴールが亡くなった際の特別番組で「タゴールを失つて (Raihana)」という詩を朗読したのが公の場で聞かれたノズルルの最後の肉声となる。ベンガルの二大詩人、タゴールとノズルルはほぼ同時にその舞台から姿を消したのである。

その後完全にことばを失ったノズルルだが、七二年には前年に独立を果たしたバングラデシュより国民詩人として迎え入れられる。そしてそこに用意された邸宅で、七六年に息を引き取った。

数多くの新しい歌が生まれているなかで、ロビンドロ・シヨンギート、すなわちタゴールの歌と、ノズルル・ギーティ、すなわちノズルルの歌は、今なおベンガルの二大歌謡である。そしてタゴールの歌にはバウルの歌の、ノズルルの歌にはコビアルの歌のエッセンスが少なからず反映されているのだが、その

いずれもが実はベンガルの民俗歌謡をその源泉としている。およそ宮廷文化が発達することのなかったベンガルでは、一般民衆こそが芸術文化の主たるパトロンであり続け、それは今日においても変わらない。そして同じ民俗歌謡をもとにしながら、バウルは求道者として、コビアルはエンターテナーとしてその道を切り開いてきた。コビアル率いるコビガン、特に勝負としてのそのありようは今日ではほとんどその姿を消したが、バウルの歌は今なお典型的なその姿とともに健在である。もともと今日のバウルは川岸で人の来るのを待っているだけではない、海外にまで公演旅行をするバウルもいれば、CDをヒットさせるバウルもいる。それでもバウルはやはりバウルであり、有名になるバウルを尻目に、どこか人里離れた場所に佇む「本物の」バウルを捜し求めるものが引きも切らない。そしてこれが「黄金のベンガル」の、今日の音楽シーンである。